

島尾敏雄非小説集成1

島尾敏雄
非小說集

南島篇
I



島尾敏雄非小説集成（全六卷）

第一卷 南島篇Ⅰ

昭和四十八年二月二十八日初版第一刷発行
昭和五十年九月二十五日二版第一刷発行

著 者 島尾敏雄

発行者 高橋直良

発行所 冬樹社

東京都千代田区神田神保町二の十八 二101

電話〇三（二六四）〇三四六 振替東京八一七七五七

印刷所 本文・稲葉印刷株式会社

平版・ラン印刷社

製本所 一重製本株式会社

装幀者 秋山法子

©Toshio Shimao 1973 0395-00401-5190

第一卷 目次

南農篇Ⅰ

「沖繩」の意味するもの	七
加計呂麻島	三
南島の冬	二
奄美大島から	三
奄美大島に惹かれて	六
奄美群島を果して文学的に表現し得るか？	三〇
南西の列島の事など	三七
島の闘牛	四〇
竜郷紀行	四三
名瀬の正月	四四
久慈紀行	四六
「大島代官記」について	五五
名瀬だより	五八
一 名瀬の町、その最初の印象と町のすがたの あらし	六〇
二 その気候	六九
三 町の人々と背後の歴史	七〇
四 島の中の町の現実	七九
五 年中行事の意味するもの	八四

六	市民生活など	二〇六
七	災厄——台風とハブと癩と	二〇七
八	名瀬のことば	二〇八
九	周辺の村落	二〇九
一〇	民間信仰	二一〇
二	島のカトリック	二一一
	二つの追悼文	二一七
	文学果つるところ	二一九
	われわれのなかの南	二二〇
	南島がもつ力	二二一
	鹿児島県立図書館奄美分館の開館について	二二二
	離島のなぐさめ	二二三
	奄美通いの船	二二四
	鹿児島県立図書館奄美分館が設置されて	二二六
	奄美の夏	二二八
	最近の図書館の動向	二二九
	名瀬は混沌の中に	二三〇
	アマミと呼ばれる島々	二三七
	南の島のどこか	二三〇
	沖繩らしさ	二三三

南島について思うこと……………二二五

奄美大島……………二二四

大島だより……………二二七

南の島での考え……………二四三

あとがき……………二四八

解題……………二五〇

島尾敏雄書目……………二五七

南島篇 I

鹿兒島県
種子島

屋久島
吐噶喇列島

喜界島
奄美群島
大島
加計呂麻島
徳之島
沖永良部島

沖繩群島
久米島
慶良間列島
沖繩島

大東諸島

沖繩県

先島諸島
宮古群島
宮古島
八重島群島
西表島
石垣島

台湾

「沖繩」の意味するもの

ぼくが沖繩に氣持がひかれるのは、なぜだろうということを反省しないわけにはいかない。それはぼくがいかに沖繩の自然と人に氣持を寄せてみたところで、ぼくが沖繩生れでないという事実は、一まず決定的なことだと考えないわけにはいかないから。

ふり返ってみるならば、ぼくが沖繩に心ひかれはじめてから、幾多の歳月が流れた。

たとえそのはじまりが少年の時に読んだ馬琴の「椿説弓張月」というような誇張されたつくりごとであったにしても、そのときの異様な興奮を忘れることはできない。それはどれ程か幼稚な理解であったことか。しかし、ぼくが興奮したのは、ちっぼけなこの日本の国のなかに、やっと辛うじて見出すことのできた、何かわくわくするような桃源境の氣配を感じたからに外ならない。

この日本の国の、眠くなるような自然と人間の歴史の単一さには、絶望的な毒素が含まれている。桃源境などといえば誤解を招くが、ぼくがいたいのは、もうわれわれには見失われてしまった「生命のおどろきに對するみずみずしい感覺」をまだうそのように残している島が、この不毛の列島の中に残っていたということだ。

日本国中どこを歩いてても、同じような顔付と、ちょっと耳を傾ければすぐ分ってしまうような一本調子の言葉しか、ないということは、すべてのものを停滯させ腐らせてしまわずにおかない。そ

ここでは鉄面皮なおせっかいと人々をおさえつけることだけが幅をきかす。おそろしく不愉快なひとりよがりと排他根性。違ったものがぶつかり合って、お互いに骨を太くし、豊かな肉をつけるという張合から、われわれは見離されていた。いや沖縄を再発見するまでは。長い間沖縄は薩摩の介在であいまいにされていた。

ある日、民芸品をあつかう眼付で沖縄が見直された。大和の人は物ほしそうに沖縄を見物に出かけて行った。そしてそこで、野放しにされている、感情の豊かな（というのは生活に裏打ちされたといってもいい）芸術品と、島の人々がおしげもなく使う典雅な古脈を伝えたと言葉を見出した。旅行者は、それらが保護されずに亡びゆくにまかせられていることをなげいた。沖縄の人々はもっと自分の郷土に自信と愛着を持たなければならぬと教誡した。しかし不思議なことに（実は当然のことなのだ）地元の人々はその呼声に不快な顔付をした。大和の人は多分感謝されると思っていたのに、好意がそのまま受入れられないことに腹をたてた。しかしこれはどこか筋が違っているのではないかと思わせるものを含んでいたのだ。

その大和の人たちの好意の中に、相変らず沖縄を腐らせてしまう要素を決して除こうとしていない部分の残っていることを、沖縄の人たちは本能的にかぎつけることができたのだ。

たとえば、あの沖縄民芸品展覧会というような場所にいてみるといい。

そこには「おきなわ」などありはしない。ぬけがらがあるだけだ。沖縄の民謡と踊りが人寄せにつけ加えられるかも知れないが、それはとりすました会場の雰囲気骨抜きにされたものだ。やがて踊りがたけなわになって、あの毛遊び風の乱調子になり鳩吹き口笛をならして沖縄の人々が乱舞し始めれば、大和人はぼかんと取り残されてしまう。沖縄の人たちの間に緊密な親和感がみなぎり、

不運であった歴史に対する反逆が凝集されるのだ。たとえばの話だが、沖縄民芸品を茶人のように身につけて、アメリカ風に着飾らせた子供たちにママと呼ばせている大和の奥さんたちは、ほんのところで沖縄とは無縁ではないのか。彼女たちが別のところで、こんなふうに行ったとしても、もともと矛盾ではない。彼女たちにとって、沖縄民芸品は宙に架っている装飾品だから。「あの人、沖縄の人ですってねえ。そういえば、どうりで言葉もどこかおかしいし、顔付もちょっと違っているよね」

ぼくが思うに、われわれは沖縄をそのようにしか感ずることができないという泥沼を周囲にめぐらし持っている。沖縄への関心などというものは（たとえば踊りとか蛇皮線とか歌とか言葉に対して持つ一種のエキゾティシズム）大なり小なりこの窮屈なわくから脱れることができない。精神の安易な部分がそれと結託する。いや何もぼくはそれらの現象を非難しているのではない。それらはもっともっと商魂たくましく宣伝普及すべきだ。沖縄情緒は、商品として大和を完全に圧倒すべきだ。今のところその手しか残されていないと絶望的に肯定するわけだが、がまんがならないのは、鹿児島人は島ン衆を仲間から外ずし、するとその大島人は那覇人を、そしてナファンチュは糸満、久高人を、というように、順おくりの下ざまに見ていく無意味な悪循環が、ぼくたちを窒息させていることだ。

沖縄の存在が、心をのびやかに開けてくれているということ（日本を多様性している）をぼくは考える。言葉の通じない素晴らしい場所がわが国の中に確にある、ということは、普通人々が考えている以上に（いや人々はほとんど気付いていないが）歴史の停滞を救って新鮮にする重要な要素であることだ。そのことに気付かねばならぬ。

われわれを、過去において（そして実は現在もおその要素を含んでいることを強調したいのだが）西の方の世界につないでいたものがあるとすれば、それはポルトガル人らによってゴレス人とかレキオス人と呼ばれて南海にふくれで行った沖繩の人たちこそ、それであった。

われわれはいつわりの多い官公文書を資料にした歴史だけが歴史なのだと思ひ込んでいるようなところがある。沖繩が新鮮な血液をいつも下積みの状態で日本の歴史に注入していた隠れた底の事実を、ひとつひとつ点検して確認すべきだ。

ぼくは沖繩に生れなかったことを後悔しているといってもいい。偶然がぼくを沖繩に近寄らせなかっただけなのだが（戦争だとか軍の機密だとか旅券だとかいう、そういう一群のけちくさい理由に、ぼくがつき当ったことが仮に偶然だとして）ぼくはせめて自分の子供に奄美大島人の血液を混入しえたことに満足しよう。いわばぼくは、半ば同じ被害者（いささか文学的過ぎるこういう言い廻しを許してほしいが）の地位を獲得した。（ぼくは妻の先祖が沖繩から移住してきたという言い伝えを信じているし、もともと奄美大島の諸島は沖繩三十六島として形成された事情もあるのだから。）

しかしやがてぼくは、東京の町なかできいた島のなまりがなくなつかく、話しかけても、話しかけられた對手がなかなかその素性をあかしてくれない、という現実にもとにぶつかった。それはそれだけの苛酷な世間の表情が存在しているという事実があった。南島の人たちがその出生をあらかじめしたがない理由は従って生ずる。つかまえ所のないエアポケットのような場所での大和の人のひそひそ話をする声きがきこえてくるからだ。

たとえば籍を東京に移してしまったり、大島の人ならば鹿児島県人だと返事をしたりすることは

常識となっている。(もちろん、行政上大島は鹿児島県に違いないが。大島人は、与^{アタマ}だとか福^{フク}だとか喜^キ、計^{ヘカリ}、徳^{トク}などという一字苗字をかくそうとして、人それは封建の時代に薩摩藩の恣意で強制的にそうさせられたのであるが、戸籍届をするときに名前の上に一字余分の字をくっつけてだす方法を得した。たとえば福という家に男の子が生れて利夫という名前をつけたとしたら、「田利夫」と届出して置けば、少くとも綴字の上で、その男の子は福田・利夫になることができる。しかし女の子は嫁に行き苗字が変わるからその方法がとれないために同じきようだいで兄は福田、妹は福、と違った苗字で呼ばれるようなことが大島の小学校では珍らしくない。)これは何というユーモラスな抵抗だろう。ぼくたちが伝統的な考え方にもしいやなら反抗したとしても認められうる基盤がわれわれの社会にあるならば、こんなことはたちどころに消え去ってしまうだろう。こんな窮屈な心遣いなど誰がしよう。ほんのすこしだけ偏見を横の方に押しやれば、沖縄や大島の人名に表現された愛情の豊富さは他に比較しようがないことに気付くはずだ。

現実には、大和に上^{ノボ}ってきて、折れ曲って行くいきさつが南島人をこわばらせてしまっているのだ。歴史のにがさをかみしめている者は、だから、南島の人たちこそ、といわなければならぬ。彼等こそ、日本の怠慢に七首をつきつける権利を持っている。従って日本人や日本語の素性のあいまいさは、この場所からつきつめられなければならないし、日本の文学の動脈硬化はここから輸血されなければならないといえよう。もちろん見世物レビュー風にではなく対決しつつぶつかり合うという方法によって。

ぼくが過去において幾度か沖縄生れと間違えられ、ぼくの苗字が偶然に南島臭いということは(尾を尻に変えたいほどだが)むしろ誇らしい気持ですらあった。ぼくが妻の郷里の人たちの会合

に呼ばれ、酒席がたけなわになるに従ってぼくのからだつきが、大和人風にこわばってきて（これは認めないわけにはいかないが）「アンチュヤ、ヤマトンチュド」と、たとえいわれたにしても、ぼくはくじけない。「大和人ト縁結ブナヨ。大和縁結ベバ、落サン涙落シュッド」といわれたところで、むしろ勇気が湧き起ってくるというものだ。

ぼくは、こんなふうにはなく（直接沖繩にいったことこそなかったけれど）過去に何人かぼくの生活に抛物線を描いて通り過ぎていった沖繩の人たちの人間像を（それが不思議に印象的であった）たのしい筆つきで書きとめてみるつもりであった。それがこんなふうになり、あるいはきまじめな書き方になってしまったことは、ぼくの筆のつたなさだ。しかし一度はこのように書いて置きたい気持のあることも事実だ。

やはりぼくの精神風景の中で大きな場所を占めている「おきなわ」が、ぼくにとって一体何であるかということを考えてみることを、素通りするわけにはいかない。「おきなわ」をわれわれの国の中に持っていたということは、少くともぼくにとって、荒廃の中に幸運にも見つけ出した安堵だといえよう。ぼくたちは「おきなわ」をひそひそ話や趣味としてではなく、沖繩の辿った悲劇の歴史の同じ享受者として受けとめなくてはならない。

沖繩を見失うことはわれわれの枯渇だ。われわれはそこを切離すことを肯んじてはいけなない。ぼくは不思議で仕方がない。われわれの過去の文学はどうして「おきなわ」をそっと伏せてきたのだっただろう。

加計呂麻島

加計呂麻島^{カケロマシマ}といつてもおそらく知っている人はありますまい。ふしぎなことにはその島に住んでいる人さえが、自分たちの住んでいる島の名前が、加計呂麻だということを知らないと思えるふしがある。

その名前からうける珍奇な感じで、私は島の年寄りにきいてみたことがあった。しかし彼はその年になるまで、そんな言い名をきいたことがないと返答した。そのうち二、三の島びとから、私はおなじ返答をえた。これはいささか奇態なことだ。私はあきらかに海図や、多少くわしい巷間流布の地図には、書きこまれている加計呂麻という字面と、その耳なれない読みかたを、まちがっておぼえたわけではない。

とするといったいこれはどういうことか。加計呂麻といういいかたがその島では通用しないとすると、それを外部から加計呂麻とよびかけてもむなししい感じもする。しかしその名前が古くからその島を言い表わすときに用いられてきているとしたら、それもまたしりぞけてしまうわけにはいかない。

馬琴もかつてその「椿説弓張月」の中で、為朝が渡った島のひとつに、「かけろま」島を記録していることだ。(いまは手もとに書物がないので正確な字は示せないが、加計呂麻という書き方で

はなく違う漢字で「かけろま」にあてていたと思う。まして島びと自身、その島そのものを言い表わす言い方を持っていないので、それはどうしても「かけろま」島というより仕方がない。

島びとは自分たちの島を、鎮西村^{チンサイソン}あるいは実久村^{サネクソン}という。つまり島は二つの村に分れているからだ。どちらも為朝に因縁のある名前だ。為朝がこの島で生んだ子供に実久三次郎というのがいたと言ひ伝えられている。別に、その島と隣島の対岸の部分を含めての「瀬戸内^{セトウチ}」という言い方で自分たちの島を言い表わしてもいる。またその地方の方言でヒギャブテということもある。ヒギャは東、ブテは方面の意味だ。

南九州の人ならあるいはああそうかと見当がつかれたかも知らない。そう、加計呂麻島は鹿児島
の南方海上に点在し横たわる奄美群島の離島の一つなのだ。

大島本島といわれる群島中最大の（ほぼ淡路島^{トウジ}ぐらいの、そして形もいささかそれに似て、先がとがり尻が太く広く、唐芋のような）島の島尾^{トウビ}の部分に齒車がかみ合うごとくくつついている離れ島だ。その大島とのあいだの瀬戸は大島海峡と呼ばれ、離れがたいのを無理に引きちぎったふうにこの二つの島は一方が出張れば片方が引っこみ、一方が引っこめば片方が押しでる具合に、複雑に海岸線を入りくませ合い彎曲して両端の海峡口は袋の口を扼するごとく狭くしぼられているので、海峡内は波のおだやかな内海を形成している。波荒き大洋の天然の避難港として昔こは艦隊の碇泊地として利用されたくらいだ。そのせいであるいは島びとは自分たちの島を大島本島と結びつけてしか考えなかったのかも知れない。

その意味で「かけろま」は「かげしま」の訛伝ではないかという説がでてくるのはもっともなことで。